

のあとを引うけて二年ほど経営した人があつたが、この人の名は譲つた高橋商店も忘れていた。

さてこの人の売捌店をひきうけて大正十二年から小樽新聞、北海タイムス、旭川新聞、旭川めざまし新聞、東京各社紙を取扱っている今井美之も記憶していない。敗戦後旧タイムスとは別に創刊された北海タイムスが専売になつた昭和三十一年堀本美智男、北海日々新聞は昭和三十三年三月から高橋善記が販売店であつたが、両社の合同によつて、現在両者共にタイムスを売捌いている。

第十章 音 楽

幾寅琴の会は初め富良野町阿部照子社中に学び、後に宮城道雄会旭川支部、支部長間藤つや子に学んだ富良野町富永スミ子先生を迎えて金曜日と土曜日を稽古日に昭和三十三年十一月創立したのである。

富永先生は本村収入役富永清次の長女なのでことに幾寅と関係が深く、山岸与平を会長にいただき、副会長に柴田君江、池野澄子、幹事に松本チエノ、山岸リエ、松本波子、佐藤ミサヲ、書記には水谷照子、永須静子、坂

下キヨ子、会計黒田美津代、企画小野つる、兵藤マキノ桐山政の皆さんが総がかりで世話をしている。

かおり高い日本の音色の箏曲に純情な意慾をうちこんで精進しているのは松本悦子(役場)山岸文子、永須りえ子、水谷由美子、桐山静子、小野隆子、兵藤栄子、藤島とし子、柴田美智子、池野英子、黒田沙智子、坂下美千代、佐藤友子、松本悦子(営林署)小出道子の皆さんである。

金山追分民謡研究会は昭和三十年鉄道に奉職している村上石治を中心として創立された。池部昌英が会長である。

村上石治は上川地区のど自慢の代表としてしばしば旭川放送局の電波にのり金道大会でも活躍した。

第十一章 其他の文化

第一節 劇 場

落合の劇場は大正以来倉庫を利用したものがあつたが劇場としては昭和十二年からである。山上富次郎の経営で、山上栄昭がこれをつぎ、昭和三十三年八月十五日近代的に改築落成した。

幾寅の劇場としては山岸与平が幾寅座を経営したのが初めと見てよい様である。鈴木和男が幾寅劇場を初めたのは昭和二十九年であつた。

山岸与平以前は学校や農協の倉庫がしばしば代用に使われた。

金山に於ける劇場の起源は明治四十年の昔、石田某という土建業者が現在の黄金町の神社前通りにつくつたのが元祖である。「芝居小屋」という名で親しまれていた通り活動写真より芝居が多かつた。

大正十一年この建物を引うけた中原熊市が自分の宅地に移転させると同時に新装を施して小屋開きをしたが、棧敷の一部が落ちるといふ満員だつた。

活動写真と芝居を組合せた連鎖劇がその頃流行したのであるが、この金山座は大正十五年頃まで使用した。

この終末の数年前から富士製紙会社が、現在の電話中継所のところに「ダイヤモンド座」といふ劇場をつくつていたが、昭和六年会社の閉鎖と同時に終末をつげたのである。

その後川島旅館裏の倉庫がしばしば劇場の代用に使われ、昭和三十一年七月磯江茂の「金映座」が出来て今日に至っている。

下金山の劇場の起源をたずねると、昭和八年頃までは馬検場の附近にあつた青年会館がその役目をしていた。旗をたてて、にぎやかに街廻りをして宣伝した時代である。

昭和八年消防組が公開堂をつくつてから、ここが利用される様になつた。今井美之が今井興業部を起したのは昭和二十五年、全国映画連盟に加入したのは二十七年であつた。

第二節 釣

幾寅の釣では内田嘉人を指導者とし近野福松を長として、昭和二十六年に結成された幾寅の一等会がある。会員は東谷稔外二十三名あつた。四年位つづいていたが、二尺七寸のイトウをあげ、虹マスは一尺七寸五分までつりあげた。

金山の釣では古い人では大物釣りの内野善太郎がいるが、小物釣りには人もおそれる佐藤利吉、山名林蔵がおり、この二人の通つたあとには草も生えないという。一匹ものこさず釣りあげて行くほどの名人である。

鹿越の釣では米山清松、落合には佐藤幸吉の釣天狗会がある。